り、東國のすゑまで、諸國の人の上下往來する日本橋なれば、まことにせきあふもことわり也、橋の左もなる市の聲、橋の上なる人の音、さらに物のわけもきこえず、只わや〳〵とどよみわたるばかり也、

あめがしたなびきわたりて君が世のさかゆく江戸をしる日本橋

〔江戸鹿子一〕橋

日本橋　南北にわたされて、橋の上にて見れば、旭日東嶺に出るをまのあたりにのぞみ、又西山にいり、虞淵に類する有さま、眼前に見つくしてならぶ橋なし、よつて日本橋と名付とかや、〇中略橋の下には魚船、槇船、あるは乘合の船どよみになりて、駒形、兩國、金龍山まで乘合よと、我こゑごゑによぶも、目さむるこゝちして、すべて物のわけもきこへず、

〔江戸名所咄一〕日本橋より北の町

十間棚屋むろまちを、三町行ば日本橋南北にかゝりつゝ、長さ壹町あまりあり、下は魚船薪船、數百艘こぎつどひ、日毎に市ぞたちにける、

〔源平盛衰記二十三〕源氏隅田河原取陣事

隅田川橋

兵衞佐頼朝ハ、平家ノ軍兵東國ヘ下向ノ由聞給テ、武藏ト下總トノ境ナル隅田川原ニ陣ヲ取テ、國々ノ兵ヲ被召ケリ、〇中略江戸、葛西ニ仰テ浮橋ヲ渡スベシト下知セラル、江戸、葛西ハ、石橋ニシテ佐殿ヲ奉射シ事恐思ケルニ、此仰ヲ蒙テ悅ヲナシテ、在家ヲコボチテ浮橋尋常ニ渡タリ、軍兵是ヨリ打渡シテ、武藏國豐島ノ上瀧野河松橋〇長門本平家物語作板橋ト云所ニ陣ヲ取、〇又見義經記

〔夫木和歌抄二十一橋〕名所歌中　光俊朝臣

すみだがはむかしはきかずいまこそは身をうきはしのあるよなりけれ

此歌は康元元年鹿島社に詣でけるに、すみだ川のわたりをみれば、かのわたり今はうきはし